

天敵さんはラッコを離さない

もふもふ獣人カントボーイBL 全10話

体
験
版

目次

第1話 天敵、来店 3

第2話 発情、はじめて 15

第
1話

天敵、
来店

「アジ定食おまち！ 貝汁は熱いから気をつけてね♡」

「リロくん、こっちお酒追加ね」

「あいよ。あ、しっぽ踏まないでよね、その兄さん」

港町の食堂かいがら亭。ふわふわのしっぽが座敷の間を泳ぐ

ようにすり抜けていく。

「今日も毛づやがいいねえ、看板ラッコは」

「へへ、朝いちで毛づくろいしたからね♡ 触るなら一撫で百

円だよ」

「商売上手なこと」

「ばあちゃんは常連だから、まけて五十円♡」

「ふふ、リロちゃんに撫でさせてもらえるなら安いもんさ」

「まいどあり〜。……あれ、みんな、急に黙っちゃって、どうしたの」

アザラシのばあちゃんの笑い声が、途中で止まった。

からん、と戸が鳴って、潮の匂いが変わった。

「……飯、食えるか」

戸口をふさぐ大きな影。黒い作業着に白い喉元。逆立った背
びれみたいな黒髪。

盆を持ったままリロの尻尾の毛がぶわりとふくらんだ。

（シャチだ）

海で暮らすラッコにとって、シャチは天敵。会ったことがな
くても体の芯が覚えている。

「お、おひとりさま……こちらへ、どうぞお……」

「震えてんな」

「ふ、震えてませんー。ラッコはみんなこういう毛並みの
ー」

「そうか。おすすめは」

「え、えっと……今日は貝がいいよ。網揚げの帰りでしょ、あ
ったかいの食べな。ウニもあるけど、ウニはだめ」

「なんでだ」

「いちばん大きいのは、俺のまかないだから」

「ガキか、お前は」

「ラッコにウニを譲る店員がいたら連れてきてよ。……あの。ほんとに、とって食わない？」

「今日はな」

「今日は、って……その言い方、こわいよお」

「玄海だ。今度からこの港の漁を仕切ることになった。しばらく世話になる」

「うわ……漁師団の新しい頭。よりによって、いちばん強いやつが来ちゃった」

冗談か本気か読めない目だった。

「リロちゃん、あたし先に上がるからね。戸締まりよろしく」

「はい、おかみさん、おやすみ」

人間のおかみさんが母屋に引っ込んだ深夜。誰もいない座敷でリロは自分のしっぽを抱いて丸くなっていた。

「なんだ。まだ起きてたのか」

「うわっ！？ げ、玄海さん！？ 帰ったんじゃない……」

「網を忘れた。……お前、そんなところで寝るのか」

「寝れないだけ。……ラッコってさ、海で寝るとき、流されないように誰かと手をつなぐんだよ。じいちゃんの代からの癖。

一人だと体がずーっと『起きてろ』って言うの」

「女将は」

「おかみさんは人間だもん、毛もないのに悪いじゃん。いいんだよ、慣れてるし」

「慣れてるやつはしっぽ抱いて震えたりしねえよ」

「……っ、震えてないってば」

「強がるな。目、とろとろじゃねえか」

大きな手が目の前に差し出された。

「貸してやる」

「……え？」

「手だ。つないでりゃ流されないんだろ」

「て、天敵と手えつなぐラッコが、どこにいるのさ……」

「ここにいる。ほら、早くしろ」

「う……じゃ、じゃあ、ちよつとだけ。ちよつとだけだからね。あと寝顔は見ないでよね」

「見ねえよ。寝ろ」

節くれだった指に恐る恐る指をからめる。飲みこまれそうなくらい大きい。なのに、逆立っていたしっぽの毛がゆっくり寝ていく。

「……あつたかい……くない？ シャチのくせに……」

「シャチは体温が高いんだよ」

「へえ……知らなかった……。ん……おやすみ、てんてきさん……♡」

あつという間に寝息が聞こえはじめた。玄海は空いた手で口元を覆う。つないだ手にそつと鼻先を寄せた。

「……おい。なんだ、この甘い匂いは」

「ん……なあに……てんてきさん……♡」

「なんでもねえ。寝てろ」

返事の代わりに小さな手がきゅうつと握り返してきた。玄海はもう動けなかった。

第
2
話

発情、
はじめて

「リロちゃん、顔まっ赤よ。熱でもあるんじゃないの」

「だいじよぶ……ちよつと、エネルギー切れなだけ……はは」

「無理しないの。今日はもう閉めるから、奥で休んでな」

「うん……ごめんね、おかみさん……」

体の芯が朝からずっと熱い。ラッコにも季節にいちど発情期が来る。じいちゃんは「番のいる子だけの話」と言っていたのに、一人の自分にどうして。

誰もいない座敷。畳に丸くなっていると、からんと戸が鳴った。

「……鍵、開いてたぞ」

「っ、げ、玄海さん！？ きよ、今日はもう閉店……っ」

「わかってる。表まで、匂いが漏れてた」

「にお……っ、や、やだ、来ないでよお……っ」

「シャチはな、声を飛ばすだけで、どこに何がいるかわかる。……お前がどこで隠れても、無駄だ」

畳を這って逃げる。けれど大きな手に足首をつかまれ、あつけなく引き戻された。

「発情、はじめてか」

「し、知らな……っあ♡」

「濡れてんな。まだ触ってもねえのに」

「ちがつ、これは、発情期の、せいで……っ」

「へえ。じゃあ、誰のせいで濡れたか、言ってみ♡」

「い、言うわけ、な……っあ♡」

太ももの間を節くれた指がなぞる。下着をずらすと、まん汁がとろりと糸を引いた。

「すごいな。お豆、こんなにぷっくり勃たせて」

「みな……っ、見ないでってばあ……っ♡」

「ここ、こねてほしいんだろ♡」

「ちが……っ、あ、あっ♡やだ、そこ、っ♡」

「んっ♡や、やだ、声、でちゃ……っ♡」

「我慢すんな。もっと鳴け、リロ♡」

くりくりくり♡くにくにくに♡指の腹でクリトリスを転がされて、腰が跳ねる。

（なにこれ……っ♡自分でするのと、ぜんぜん、ちがう……っ♡）

「て、てんてきの、くせに……っ、あ♡」

「強がるな、リロ♡自分から腰、押しつけてきてるぞ」

「おし……っ、してな、っ♡あ、や、こねちゃ、らめ♡」

「こねられんの好きか。ちゃんと言え、リロ♡」

「す……っ、すきい……っ♡もっと、こねてえ……っ♡」

「素直だな、リロ♡発情期のカラダは、正直でいい♡」

「や……っ、勝手に、腰が……っ、とまんな……っ♡」

ぬちゅぬちゅぬちゅ♡くちゅくちゅくちゅ♡濡れた音が大きくなる。玄海が身を伏せ、お豆をれろっとなめ上げた。

「ひあっ♡な、舐め……っ、それだめ、だめえ……っ♡」

「先っぽ、こんなに小さいのに、ちゃんと勃つんだな♡」

「い、言わな……っ、あ♡あ♡吸っちゃ、やあ……っ♡」

「ここ、ぴくぴくしてんぞ♡もっと吸ってほしいって、震えてる」

「ちが……っ、ふあ♡あ♡らめ、そんな、ちゅうちゅうしたらあ……っ♡」

「ちゃんとねだれよ、リロ♡言えたら、うんと気持ちよくしてやる♡」

「んう……っ♡て、てんてきさんの、舌あ……っ、もっと、ちゅうちゅうしてえ……っ♡」

ぴちやぴちやぴちや♡

ちゅぱちゅぱちゅぱ♡揺れる腰を大きな手で押さえこまれ、逃げ場がない。

「あ♡あ♡らめ、らめっ、なんか、くる♡くるっ♡」

「もうイっちゃうのか、早いなあ♡いいぞ、てんてきの舌で、

イけ、リロ♡」

「い、いくっ、いくぅ……っ♡♡んゝゝゝ♡♡」

びくびくびく♡がくがく♡と腰が跳ねて、リロは初めて、他人の口でのぼりつめた。

ぐったりした太ももに硬くて熱いものが当たる。その大きさに涙目を見開いた。

「な……なにそれ、おつき……」

「今日は、指と舌だけにしといてやる」

「……え？　なんで、とちゅ……っ」

「はじめてが発情でぐずぐずのまんまじゃ、かわいそうだろ」

「っ……ばか、いじわる……」

「次までに、覚悟しとけよ」

戸が閉まっても、奥に残された疼きだけが引かなかった。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。